

## 生きてゆくことの意味

「当たり前が、ある突然、非日常になる」

そしてまた「当たり前のある場所に戻る」

### 競泳 池江璃花子選手の闘病の日々

先日、テレビで、大きな病気に襲われ、東京オリンピックで泳ぐことを諦めざるをえなかった池江選手の特集番組が放送されていました。退院して、復帰を目指しているという事はマスコミ報道で知ってはいたものの、20代前半の一人の若い女性が、病気とどのように向き合ってきたのか、その一部を知る事ができて、感銘を受け、そして様々な事を考えさせられました。私のような年代になっても、若い方々の生き様から見習うべき事が数多くあると、改めて実感しました。

池江選手は、飛ぶ鳥を落とす勢いで、記録を連発し、国内では圧倒的な強さを示し、このまま東京オリンピックに出場を果たすことが出来たら、複数のメダルも期待できるのではないかと注目を浴びていました。

そんな矢先の2019年2月、白血病が発覚し、「必ず戻ってきます。」のメッセージとともに入院生活に入りました。言葉では言い表せない苦しさだった事が映像でも分かりましたし、自身もその苦しさをインタビューで素直に表現していました。高校の卒業式に参加する事も出来ず、病院で一人、制服を着て証書を持って写っている写真が紹介されていました。

その年の12月になんとか退院できた池江選手は、2024年のパリオリンピック目指してのリハビリを始めますが、大きな病での入院生活で、体重が10kg以上減り、懸垂も一度もできない状況で、トップアスリートの筋肉や体力はすでに失われていました。

そのような中で、King Gnuが歌う「白日」の「・・戻れないよ 昔のようには 煌めいて見えたとしても 明日へと歩き出さなきゃ・・・。」という詩に共感しつつ、そして復帰を待ちわびていた人々に対しては、期待に応えられないかもしれないと涙が溢れます。「自分はこれまで頑張ってきたけど、もう人を勇気づけることができない。自分には何も無い。泳いでいなければ何も無い人間なのかなと思った。」と悶々とした葛藤の日々を送ります。

一方で入院中に考えた事は「もうだれかのために頑張る必要が無いと思った。オリンピックに出られなくてよかった。メダルのプレッシャーがのしかかっていたので解放された。もう頑張らなくてもいいんだと思った。日本記録なんていつも出るわけじゃない。でもいつも期待される。そんなに記録が出ないときもあるのに・・ あまり期待しないでほしい。」入院して、様々な気持ちがあふれ出てきたそうです。他人には計り知れない苦悩があったのだと思います。

退院後、一時期、水泳から離れたいと思った時期があったようです。泳ぐこと以外の自分をみつけようとしていたとの事です。大学の講義に積極的に参加したり、ショッピングをしたり、友人との時間を過ごしたり、自分の時間を楽しもうとしますが、大きな違和感が湧き上がります。そしてふと「自分は何のために泳ぐのだろう」と自分の心に問い始めます。

そして、過去の自分の映像を積極的に見始めます。「あの頃は楽しかった。」とつぶやいていました。そしてインタビューしているテレビ局の人に向かって「やばい。私、めちゃくちゃ早くないですか？」と目を輝かせます。そして「水泳ができなくなった事は結構重い。食べ物が食べられなくても、隠れて食べられるけど、泳ぐ事ができない事は次の日になってもできない。泳ぐことが日常だった。」

大きな気付きを得た池江選手はふたたび水泳についての意義を考え始め、「**当たり前前**の事を**当たり前**にやれる。それが**当たり前**ではないのだと分かってきた。だから泳ぐ事は**幸せ**なんだ。**当たり前**が**幸せ**だったんだ。泳げなくなって大切な何か**が**分かり始めました。」と話します。

そして、病気が発覚した2月8日と同じ1年後の2月8日に、再び、本格的な陸上トレーニングを開始します。「**夢を絶たれた1年前と同じ2月8日**だけど、今日は**人生の記念日**かな。」と笑顔で前を向きます。そこからは、周囲が驚くような回復ぶりをみせ、言動にも大きな変化が見られます。「**今の自分が**できる事を一つ一つ積み重ねよう。そしてそれが**できる**ようになる**これからの**自分の成長を楽しみにしよう。今は、**目標**に向かって前に進むしかない。そして、それが**誰か**のために役立っていれば、それで**良い**と思う。」

順位や記録をライバルと競う事の挑戦ではなく、「**自分の泳いでいる姿**を見てもらって、**自分と同じ**病気の人や苦しんでいる人に**勇気**を与えたい。**使命感**みたいなものですね。それを人に伝えていきたい。」としっかりとした言葉と笑顔で話していました。泳ぐことの意味が大きく変わったのだそうです。

そして、ついにプールに入れる日がきます。「**でも、また泳ぐ事に**慣れてしまうのかな。それが**当たり前**になるのかな。」とポツリと言葉が漏れます。「**でも**自分が泳げなかった**時期**の事を**絶対**に忘れない。泳げることは**幸せ**なんだ。また**当たり前**の場所に戻ります。」

「**当たり前**の場所に戻る。」私達が使ったことがないような表現の仕方です。きっと苦しさを克服しようともがき苦しんでたどりついた言葉なのでしょう。そして、泳ぎ終えて「**言葉**では**あ**ら**わ**せ**な**い**楽**し**さ**です。**忘**れ**ま**せ**ん**、**こ**の**日**を。**い**い**な**あ**水**泳。」と喜びをかみしめます。

その後、すぐに新型コロナウイルスの流行拡大で泳ぐ機会をまた奪われてしまいますが「**た**く**さ**ん**の**人**が**日**常**を**奪**わ**れ**て**し**ま**っ**た。**当**た**り**前**が**あ**る**日**突**然**、**非**日**常**に**な**っ**て**し**ま**う**。**当**た**り**前**だ**け**ど**当**た**り**前**で**は**な**い**、日**常**生**活**の**感**謝**と**い**う**事**を**考**え**さ**せ**ら**れ**ま**す**。」と自らの経験した事を振り返りながら、自信を持って語ります。そして最後に「**これ**からは、**自**分**の**泳**ぎ**が、**だ**れ**か**の**励**み**に**な**る**事、**結**果**よ**り**も**、**ど**ん**底**に**い**た**人**間**が**、**こ**こ**ま**で**上**が**っ**て**く**る**事**が**出**来**た**と**い**う**姿**を**見**せ**た**い。」と、とても自信溢れる言葉でインタビューが終わります。

池江選手の1年数ヶ月の様子から、今、世の中がこのような事態になっていても、彼女の姿をとおして、多くの人々が少しずつ前を向いて進んでいけるような契機になるのかなど、感じました。これはトップアスリートであればこそその言葉なのか、病気を克服した人だからこそその言葉なのか。それとも私達にも共通に感じる何かがあるのか。確かな事は20代前半の一人の人間の生き様に何かを感じる人も多くいるのではないかという事です。

「泳ぐことの意味」それは、彼女にとって「生きてゆく意味」なのかもしれません。私達の日常も**当**た**り**前**の**事**が**繰**り**返**さ**れ**ま**す。しかし、その**当**た**り**前**の**日**常**に**本**当**に**大**切**な**も**の**が**隠**さ**れ**て**い**る**の**か**も**し**れ**ま**せ**ん**。竹内まりやさんが作詞して自らも歌っている「いのちの歌」の中に「**本**当**に**だ**い**じ**な**もの**は** 隠**れ**て**み**え**な**い さ**さ**や**か**す**ぎ**る日**々**の**な**か**に**、**か**け**が**え**な**い喜**び**が**あ**る」という一節があります。本当にそのとおりでないと心から思います。

この時期、学校では、生徒達がい**な**い日**々**が長**く**続**い**て**い**ま**す**。本来であれば普通ではない毎日が、日常になっている事に私は、とても怖さを感じています。この感染拡大が早く収束、そして終息してほしいと願うばかりです。「**当**た**り**前**の**毎**日**が**本**当**に**幸**せ**だ**っ**た。」本当に強く感じます。そしてまた日常が戻ったら、生徒達がいる毎日に慣れてしまうの**か**も**し**れ**ま**せ**ん**。しかし、このようにも思うのです。「**でも**、この空白の3ヶ月は**絶対**に忘**れ**る**事**は**な**い。」 様々な立場の様々な人が**本**当**に**池江選手と同じ気持**ち**な**の**か**も**し**れ**な**い**な**と**強**く**感**じ**て**い**ま**す**。